

# 九州支部だより



No. 114 2012年3月

## 掲載内容

- ◆2011年度「第33回日本気象学会九州支部発表会」の報告
- ◆2011年度「支部奨励賞」の授賞報告
- ◆支部会員からの便り「長崎原爆投下時の気象観測記録—新たな認識—」（豊福隆夫）
- ◆事務局からのお知らせ

## 2011年度「第33回日本気象学会九州支部発表会」の報告



発表原稿は、以下の会員専用ページでご覧いただけます↓  
<http://msj-kyushu.jp/member/others.html>  
ID とパスワードをご存知ない方は、事務局までご連絡ください。

特別講演の様子

九州支部会員の研究発表・交流のために毎年開催している「日本気象学会九州支部発表会」を、今年度は2012年3月3日（土）に福岡管区气象台（福岡市中央区）で行いました。

今年は、特別講演1題、一般講演18題の発表がありました。発表題数は例年より少ないものとなりましたが、各発表時間を例年より多く確保することができました。また参加者が約60名となり、充実した発表・活発な質疑応答がなされ、予定していた時間をオーバーし盛況のなか閉会となりました。

最後になりますが、講演者ならびに運営に協力いただいた皆様のおかげで発表会を終えることができました。この場をお借りし、お礼を申し上げます。

今年の支部発表会での特別講演は、宮原三郎氏（九州大学大学院理学研究院）により「中層大気力学研究の発展と私」と題して行われ、ご自身の取り組まれた研究内容をはじめ、世界の研究者と研究成果発表を競い合っていた当時のエピソードなどもお話いただきました。

また、昔の写真も紹介され、若かりし頃の研究者の写真が紹介されると会場からは笑いが起きていました。最後は、若い方へのメッセージで締めくくられ、大変有意義な講演になりました。



# 各発表の様子



# 2011年度「支部奨励賞」の授賞報告

九州支部では研究を本務としない支部会員または若手支部会員で「気象学の向上に資する研究を行っている」「気象学の教育・啓発活動を積極的に行っている」「気象学を応用した活動で社会に貢献している」のいずれかに該当する方に「支部奨励賞」を贈呈しています。

本年度は宮田和孝氏（福岡管区气象台観測課）が奨励賞を受賞され、贈呈式（九州支部発表会場）において、橋田支部長より賞状及び記念品が贈呈されました。

以下、ご本人の喜びのコメント、さらに推薦理由（要旨）を掲載します。



宮田和孝氏（右の写真は、支部発表会にて講演する様子）

本日は、このような賞をいただき、誠にありがとうございます。私は、気象学会に入  
って日が浅く、このような賞をいただくことに抵抗がありますが、このような賞をいた  
だいたからには、来年度以降も調査研究や業務に励んでいきたいと思っております。  
今後とも、よろしくお願い致します。

**推薦理由（要旨）：**宮田和孝会員は、平成8年4月に気象庁に採用され、現在は福岡管区气象台技術部観測課に在籍し、毎年、積極的に調査研究に取り組んでいる。平成23年度は、共同研究も含めて6つの課題（うち2つは単独・1つは筆頭者）の研究を行っている。

「WPRでみる竜巻の観測」調査では、竜巻発生と局地的気象監視システム(WINDAS)で提供されているストームに相対的なヘリシティ(SRH)の継続時間が竜巻や局地的大雨の監視に有益であることを見出すとともに、平成23年8月21日に人的被害が発生した福岡県内の竜巻についての事例調査も行っている。また、「風向風速計移設に伴う観測データの特徴について」や「福岡レーダーで捉えたシークラッターの考察」などの調査も通じて、実況監視技術、予報技術の向上に大きく貢献している。

宮田会員は、气象台職員として日常の業務に携わる中で予報・観測・航空業務に関する数多くの調査研究を手がけ、気象業務の改善とともに、気象学の向上に資する研究を行っており、今後の気象学への貢献も期待されることから奨励賞授与に値するものとして、ここに推薦する。

（推薦者：高橋 隆三（福岡管区气象台 技術部次長））

# 支部会員からの便り

## 長崎原爆投下時の気象観測記録 — 新たな認識 —

豊福隆夫（長崎海洋気象台）

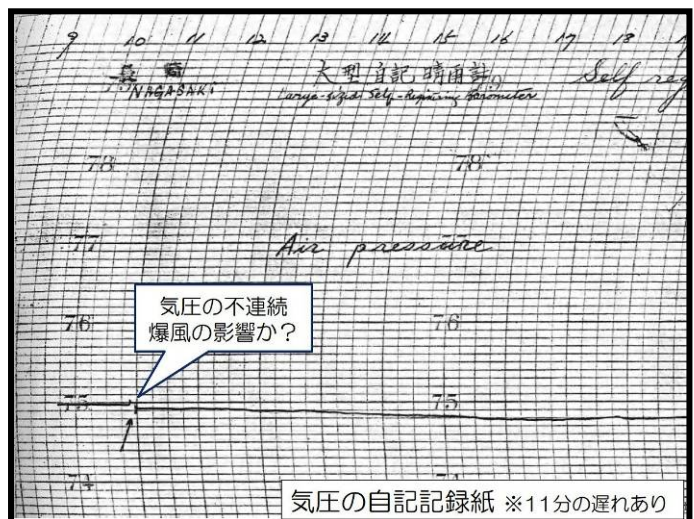
長崎のことを「ナガサキ」と片仮名書きすると、それは被爆地長崎のことを指す。同じ被爆地である広島でも「ヒロシマ」と書けば同様である。このことはいまさら説明するまでもないと思われるが、長崎に勤務して「ナガサキ・ヒロシマ」の文字に改めて原爆の悲惨さを痛感させられるのも事実である。

昨年（平成 23 年）夏のこと、筆者が勤務している長崎海洋気象台に出前講座の講師派遣要請があった。依頼者は「長崎平和推進協会」と称する公益財団法人で、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与することを理念に、修学旅行生等を対象とした被爆体験講話による平和学習の実施をはじめ、アジア青年との平和交流、講演会や平和イベント等を実施するなど、様々な平和推進事業に取り組んでいる団体である。この団体には「平和案内人」と称するボランティアが数多く登録されており、被爆者の高齢化が進む中、被爆の実相と平和の尊さを次世代に伝えていくために、主に長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、平和公園周辺の被爆建造物等を一緒に巡りながらガイドをしている。

今回の出前講座で要望されたテーマは「長崎原爆投下時の気象状況について」であった。聞けば、長崎への原爆投下時の気象状況に関しては被爆者の中でも記憶が様々であり、当時を知らない平和案内人がガイド中に見学者から尋ねられても即応できるようにというのが要望理由とのことであった。ただ、今を去る 66 年も過去のことであり、当時の観測資料を再調査する必要もあることから、講師の役目は気象台職員の中でも年長者に属する筆者が受け持つことになった。

筆者は長崎での勤務は二度目であるが、いままで原爆投下時の気象状況に関して深く考えたことはなく、今回初めて当時の長崎測候所（現 海洋気象台）の観測記録を調査してみた。原爆投下時の気象状況に関しては、昭和 53 年に刊行された「長崎海洋気象台 100 年のあゆみ」の中に、「特異現象」の部で「原子爆弾投下日の長崎市の気象」として著されており、これを参考に改めて当時の観測資料を調べてみた。

先ず各種の記象紙に気圧計、温度計、湿度計、風圧計の自記記録（コピー）があった。気圧計記象紙には原爆投下時刻（昭和 20 年 8 月 9 日 11 時 2 分）前後のペン書きの記録に明らかな不連続があり、これは原爆の爆風によりもたらされたものと想像できる。ただ、これら記象紙は気象台には原本が存在せず、現有のコピーもかつて長崎の平和団体が米国立公文書館で原爆の記録を調査した際に見出した資料（コピー）を再度コピーし、気象台に提供されたものであるという。長崎の気象台 OB から以前に伝え聞いたところでは、太平洋戦争終結後、米軍が長崎に進駐した際に気象台に調査団が入り、本国に持ち帰ったのではないかとこのことで、原本の所在はいまもって不明である。確かに、今回気象台の資料庫に籠もって調べてみても、昭和 20 年の記象紙の綴りの中から 8 月分だけがまるごと欠落しており、米軍が持ち帰ったとの話はかなりの信憑性がありそうである。



その他の観測記録としては「気象観測原簿」の手書きの原本が保存されており、これには定時観測の記録が整然と記入されている。これらの観測資料から、原爆投下時の長崎の気象状況が次第に明らかになってきたが、そこで新たな疑問となったのが、「当初、原爆投下目標地は小倉であったが、天候不良で第2目標の長崎に変更された」との通説の根拠となる小倉の気象状況である。昭和20年当時の小倉には測候所が存在せず、直近の下関測候所（現 地方気象台）の気象観測資料を調べることにした。幸いなことに全国気象官署の古い観測原簿は気象庁内のネットワーク上で画像としてアーカイブ化されている。これによれば当日の下関は午前中は晴れで、航空機から地上を視認するのにとくに問題となる状態ではなかったことが判明した。それでは何故目標地点が変更されたのかとの疑問が生じ、ネット上で種々検索してみた結果、前日に小倉のすぐ隣の八幡が米軍機によって空襲され、このときの火災で生じた煙が小倉付近にも広がっていたとの情報が見つかった。下関の観測原簿にも「煙霧」が記録されていることから、火災の煙が目標視認の障害となっていたのではないかと想像した。また、小倉上空で目標視認に手間取り時間を費やしたために日本軍機の迎撃に遭い、米軍機は現場を離脱せざるを得なくなって目標変更に至ったこともわかってきた。



長崎海洋気象台に残されている昭和20年の観測原簿

一方、第2目標であった長崎の気象状況はどうであったかといえば、09～11時は上空から見て視程障害となる雲が多かったと推測される。しかし、11時の天気が快晴（雲の記録がない）とあること、及び12時の日照が100%（ジョルダン式日照計）とあることから、11時頃には雲量が少なかった可能性が大きく、また、日本軍機の迎撃もなかったとのことであるから、長崎上空では米軍機から比較的容易に地上が視認できたのではないかと推察できる。

これらから、米軍機は小倉では上空から攻撃目標を視認できず、一方、長崎では市街地の攻撃目標の一つを上空から視認でき、結果として長崎に原爆が投下されたことになる。これが事実ならば、原爆投下の目標地点が小倉から長崎に変更されたのは、筆者の勝手な想像であることを断っておくが、「気象」単独の理由ではなく、「火災の煙」や「日本軍機の迎撃の有無」等も加わった複合的な理由によるものではなかったかと思うようになった。

このような新たな発見も加えながらプレゼンテーションを作成して出前講座に臨み、余談として、太平洋戦時下の気象観測データは第1級の「軍事機密」であったことも話したところ、聴衆である「平和案内人」の多くは目を輝かせて熱心に聞き入ってくれ、講演後は多くの質問も寄せられた。

今回の出前講座がきっかけとなって原爆投下時の長崎および小倉周辺の気象状況を調査して新たな発見がいろいろあったが、とくに印象に残ったのは当時の長崎測候所の手書きの観測原簿である。これには原爆投下当日の気象がその前後の日と同様に「整然」と記録されており、原爆投下という異常な状況下にあっても、当時の職員が冷静かつ客観的に気象観測記録を残していたことを目の当たりにして、その揺るぎない「測候精神」に改めて畏敬の念を覚えたのであった。

# 事務局からのお知らせ

## 「九州支部だより」の原稿募集

九州支部事務局では、「九州支部だより」への会員からの原稿を募集しています。

今号では、豊福隆夫会員より「長崎原爆投下時の気象観測記録―新たな認識―」について投稿いただきました。ご投稿ありがとうございました。

九州支部会員の活動報告、気象知識の普及活動の状況、九州の気象に関する事例解析・統計調査など情報交換に役立つ原稿であればどのようなものでも結構です。会員各位の自由な投稿をお願いします。

## 日本気象学会への入会勧誘

みなさんの周りに気象学を専攻している・気象関連の仕事をしている・気象に興味を持っているような方がいらしたら、日本気象学会への入会を勧めていただくようお願い致します。支部事務局へご連絡いただければ、入会方法などご案内致します。

## 転勤等で異動される時には

転勤等による異動の際は、新しい住所と職場名を九州支部事務局まで連絡していただくようお願いします（電話もしくは E-mail）。本部または異動先の支部（他支部への異動のとき）への報告は当支部で行いますので、会員の方の異動先での手続きは必要ありません。

## 今後の予定

- 2012年4月 第37期日本気象学会九州支部理事選挙
- 2012年6月 九州支部便り115号の発行

2012年3月発行  
〒810-0052  
福岡市中央区大濠1-2-36  
福岡管区気象台技術部気候・調査課内  
日本気象学会九州支部  
T E L 092-725-3614  
F A X 092-761-1726  
E-mail info@msj-kyushu.jp  
H P <http://msj-kyushu.jp/>